
日本テレビ『スッキリ』 アイヌ民族差別発言に関する意見

放送倫理検証委員会

委員長	小町谷育子
委員長代行	岸本 葉子
委員長代行	升味佐江子
委員	井桁 大介
委員	大石 裕
委員	高田 昌幸
委員	長嶋 甲兵
委員	西土彰一郎
委員	巻 美矢紀
委員	米倉 律

目次

I	はじめに	1
II	審議の対象とした番組	2
III	委員会の調査	3
1	『スッキリ』と「H u l u ッス」の制作体制	3
2	「アイヌ差別」を知らぬまま台本完成	4
3	収録現場で提案された問題発言	5
4	最終チェック——“無言・無反応は了承”	7
5	問題発覚後の対応	7
IV	委員会の考察	9
1	隙だらけのチェック体制	9
2	自らの制作番組に対する“こだわりの薄さ”	10
3	差別に関する知識の乏しさと放送人としての感度	11
4	差別の意図はなかったという底流	12
V	委員会の判断～放送倫理違反があった	13
VI	おわりに～差別と向き合う「しんどさ」を乗り越えて	14

I はじめに

アイヌ民族は、北海道を中心にサハリン（旧樺太）や千島列島などに居住して狩猟や採集にいそしみ、長い年月をかけて独特の豊かな文化を築いてきた。手仕事の美しさや自然の恵みを何よりも大切にして、自然への感謝を忘れない季節ごとの儀式を行うなど、いまでもそれは伝承されている。しかし、アイヌ民族には、忘れてはならない歴史がある。本州側とは13世紀頃から交易があったが、江戸時代には徳川幕府による直轄化が次第に強まり、明治時代には明治政府による北海道開拓使の設置により支配が本格化した。和人は入植により土地を付与された一方、アイヌの人々は生産と生活の場である土地を奪われ居住地を狭められた。そして独自の生活様式や文化を否定される中、1899年施行の北海道旧土人保護法を通じて、さらに日本への同化が推し進められた。

この結果、差別の拡大、構造化が日本社会に染み付き、アイヌ民族は、居住や就学、就職、結婚などのあらゆる場面で陰に陽に差別を受けるようになった。もっとも、1997年に北海道旧土人保護法を廃止し制定されたアイヌ文化振興法を契機に、アイヌ民族の文化の尊重が指向されるようになった。先住民族の権利に関する国連宣言を受け、2008年には衆参両院でアイヌの人々を先住民族とすることを求める決議が全会一致でなされた。アイヌ民族が先住民族であるとの立場を初めて法的に明確にし、その誇りが尊重される社会の実現を目的とするアイヌ施策推進法も2019年に施行され、2020年民族共生象徴空間ウポポイが開設された。こうした段階的な歩みを経て、今日では、先住民族としてのアイヌ民族の独自文化、その継承の重要性などを疑う者はいない。差別根絶への意識も紆余曲折を経ながら共有化の道を進んできたはずだった。

ところが、アイヌ民族に対する差別用語として使用されてきた、民族の誇りを根底から傷つける言葉が日本テレビの情報番組で放送された。2021年3月12日、『スッキリ』内のコーナーで、アイヌ民族について「あ、犬」と表現するシーンが地上波で全国に流れたのだ。コーナー終了から30分もしないうちに、日本テレビには視聴者からの抗議が殺到した。アイヌの人々を主たる構成員とする公益社団法人北海道アイヌ協会からも厳しい抗議が寄せられた。日本テレビは放送当日、夕方のニュース番組でお詫びのコメントを放送し、同時にウェブサイトにも謝罪文を掲載した。放送倫理・番組向上機構[BPO]にも視聴者から多数の意見が寄せられた。

放送倫理検証委員会（以下「委員会」という）は、アイヌ民族を差別する表現がなぜ放送されるに至ったのか、当該コーナーは事前収録されたVTRだったにもかかわらずなぜ制作過程でストップをかけることができなかったのかなどを詳しく検証する

必要があると判断し、2021年4月の委員会で審議入りを決めた。

なお、今回放送された明らかな差別用語を採録することは好ましいものではないが、委員会は事実関係を明確に記録として残しておくべきだと判断し、本意見書では差別発言をそのまま表記する。

II 審議の対象とした番組

日本テレビ制作の『スッキリ』は、毎週月曜から金曜、午前8時から午前10時25分まで、日本テレビ系列の26局で放送されている。放送開始は2006年4月。各局がしのぎを削る午前の情報番組のひとつであり、日本テレビの「顔」として定着していた。

『スッキリ』のコーナーのひとつに、毎週金曜日、番組終了間際に放送される「スッキリすの週末オススメHuluッス」(以下「Huluッス」という)がある。2～3分の枠を使って動画配信サービス「Hulu」のラインナップからお薦めの映画作品などを1本紹介する。日本テレビのグループ会社が運営する「Hulu」への誘客などを目指して2018年5月に始まったコーナーだ。生放送の『スッキリ』にあって、このコーナーは事前収録で制作されており、構成も紹介本数も当初からほとんど変わっていない。

問題となった「Huluッス」は、2021年3月12日(金)の午前10時17分から同19分にかけて、ちょうど2分間の長さで放送された(以下「本件放送」という)。紹介された作品は『Future is MINE —アイヌ、私の声—』(以下『Future is MINE』という)という35分間のドキュメンタリー映画である。アイヌ民族の女性が自らのアイデンティティーに悩みつつ、やがては生きる意味を見出していく様子をスタイリッシュな映像で描いた作品だ。アイヌ民族であることが嫌になったり、アイヌ語で歌う音楽グループの活動で自信を得たり、そうした経験を重ねながら、主人公の女性は先住民族として同じような境遇にあるアメリカの先住民族を訪ね、アイヌ民族としての誇りを取り戻していく。

コーナーでは、リスの着ぐるみをまとった男性タレントが登場し、字幕とともに「こんにちはっす。7万本を超えるHulu作品、今週末のお薦めはこちらっす」と定番のせりふを口にする。その後、ドキュメンタリーのシーンが紹介され、主人公のアイヌ女性が「アイヌじゃないふりをしているほうが、たいへんだったかな」と語る。続いて「今を生きるアイヌ女性の葛藤を描いたドキュメンタリー」というナレーションと字幕が入り、作品の主なシーンが映像で紹介されていく。同作品を見た著名な歌手2人の感想のコメントも盛り込まれていた。

問題発言が出たのは、本件放送の最終盤だった。「Huluッス」では毎回、締めと

して着ぐるみの男性タレントが、主に謎かけを用いてコーナーを終える。この日も同様に、コーナーの最後に着ぐるみのリスが画面に現れた。あらかじめ収録されたこの映像の中で、着ぐるみの男性タレントは「ここで謎かけをひとつ。この作品とかけまして、動物を見つけた時ととく。その心は、あ、犬！ ワンワンワンワンワン！」と発話する。このシーンには字幕がついており、「あ、犬」の言葉にはルビのような扱いで、「(アイヌ)」と明記されている。さらに、「ワン」を5回繰り返す箇所では、画面左からアニメの犬が現れ、画面中央に向けて駆けていく。

このあと、着ぐるみの男性タレントは「この作品を見てアイヌの美しさを堪能しよう」と言葉を続け、「というわけで、今週もお疲れした〜っす」と語ってコーナーを締めた。

Ⅲ 委員会の調査

委員会は、本件放送とお詫び放送の録画を視聴し、日本テレビから委員会に提出された報告書（2021年4月1日付）や関連資料などを精査した。さらに、本件放送の制作に関わった計10人から合計12時間50分のヒアリングを実施するなどして、本件放送の制作過程や問題点、放送後の対応などを検証した。ヒアリング対象者は以下のとおりである。

- A演出（制作会社P社）
- Bディレクター（制作会社Q社）
- Cアシスタントプロデューサー（制作会社R社）
- Eプロデューサー（日本テレビ）
- Fプロデューサー（制作会社S社）
- G統括プロデューサー（日本テレビ）
- Hチーフプロデューサー（日本テレビ）
- Jチーフプロデューサー（日本テレビ）
- K情報・制作局長（日本テレビ）
- L取締役（日本テレビ）

1 『スッキリ』と「H u l u ッス」の制作体制

午前中の看板番組である『スッキリ』には、司会のほか、情報キャスター、日替わりのコメンテーターらが出演し、主に、8時台は時事ニュースや社会的関心の高い話題、9時台は生活情報の企画やエンターテインメント情報、10時台は最新ニュースや天気予報、占いといった構成で作られている。

『スッキリ』は、日本テレビが制作会社に委託する形で制作されており、日本テレビのチーフプロデューサーと統括プロデューサー、制作会社のプロデューサーが制作全般を指揮している。本件放送当時、番組制作に関わるスタッフは総勢182人。このうち日本テレビの社員は12人で、他は委託先の制作会社社員、制作会社が契約している派遣会社のスタッフ、およびフリーランスだった。これらのスタッフは「時事ニュース班」「企画班」などに分かれ、かつ、曜日ごとの担当に細分化されている。

「Hu1uッス」の現場スタッフは、主に4人で構成されていた。1人目はこのコーナーに責任を持つ日本テレビのEプロデューサー、2人目はディレクターを指導しながらコーナーの放送内容を実質的に決めるA演出。3人目が、台本を書いたり収録映像を編集したりするディレクターであり、通常はこのディレクターが「Hu1uッス」をコーナーの形にしていく。ディレクターは回ごとに異なる者が配置されることになっており、月に4、5人が担当する。本件放送では、Bディレクターが担当者になった。4人目はアシスタントディレクター（委員会のヒアリング対象外）。このほか、Hu1u側とのやりとりやスタッフの人繰りなどを担う制作会社のプロデューサーからも制作に関わっている。スタッフは全員、『スッキリ』の他業務との兼任だった。

「Hu1uッス」の制作は毎月上旬、Hu1u側から翌月用の作品リストが『スッキリ』側に届くところから始まる。通常、取り上げてほしい作品が10本程度載せられている。この段階では、作品そのものは提供されないものの、作品の概要や参考情報などが示されている。そして、リストの中には、必ず放送してほしいと要請する、いわば二重丸を付した作品が含まれていることがある。リストの作品から実際に放送する4、5本を選定するのは、A演出の役割だった。その際、二重丸作品については常にHu1u側の意向を尊重していたという。

本件放送に関しては、2021年2月2日にHu1u側から3月分の作品リストがメールで届いた。『Future is MINE』はこの二重丸の作品であり、放送希望日もHu1u上での配信との兼ね合いから3月12日と指定されていた。A演出は従来への対応と同様、この作品についてもHu1u側の意向に沿って放送での採用を当然のこととして準備を進めた。

担当ディレクターの割り振りを担当するCアシスタントプロデューサーは、A演出から3月のラインナップを決めたとの連絡を受けると、ディレクター陣のスケジュールや兼務の状況などから各週の担当を決め、それぞれに通知した。本件放送の担当になったのはBディレクターであり、「Hu1uッス」の担当は5、6回目だったという。

2 「アイヌ差別」を知らぬまま台本完成

Bディレクターは、『Future is MINE』を2度視聴し、台本作成に取り掛かった。Bディレクターはアイヌ民族の存在は知っていたが、どういう差別を受

けてきたのかといった詳しい知識をほとんど持っていなかった。インターネットで少し調べたものの、アイヌ民族がどういう存在なのかを理解することが難しいとの思いは変わらなかったという。この時点で、A演出やCアシスタントプロデューサーからも特段の注意喚起はなかった。Bディレクターは第1稿としてコーナーの流れだけを記した構成台本を作り、2月15日にA演出のチェックを受けた。この段階では、男性タレントによる締めめりのせりふは入っていない。

第1稿を見たA演出は、アイヌ民族が差別に苦しんできたといった作品の具体的な内容に深く入り込み過ぎている、と感じた。A演出もアイヌ民族に関する知識はほとんどなかった。もともと民族や宗教の問題は難しいと考えており、そうしたテーマをテレビで扱うことに消極的な感覚を持っていた。また、『Future is MINE』はアイヌ民族の女性を主人公にしているが、その声は差別される側の片方の声であり、2分間という短い尺の中で一方の意見だけを取り上げるのはよくないとも考えたという。結局、A演出は、Bディレクターに対し、作品の内容にあまり深入りしない台本にするよう指示するとともに、民族問題を扱った作品は気軽に扱えないとして、コーナーの定番となっていた締めめりの謎かけについては要らない、と伝えた。

その後、2人の間では何度か電話やメールでのやりとりが続き、最終台本となる第4稿が完成した。ところが、A演出は最終台本の完成を前にして、締めめりが何もないことに違和感を覚えて従前の考えを変え、リスの格好をした男性タレントに語らせる締めめりのせりふをA演出自身が書き込んだ。それは「ちなみに今日3月12日はサイフの日。週末の無駄遣いには気をつけよう！」という言葉であり、作品の内容とは関係のないせりふであった。

この最終台本は、VTRの収録を翌日に控えた2月25日、Bディレクターからスタッフにメールで送信された。送り先は、「Huluッス」コーナーの責任者である日本テレビのEプロデューサーのほか、制作会社のFプロデューサー、同じくCアシスタントプロデューサーなどだった。連絡を受け取ったメンバーは誰も返信しておらず、感想や意見はBディレクターに届いていない。こうして収録は、アイヌ民族に関する知識がほとんどないスタッフによって作成された台本に基づいて行われることになった。

3 収録現場で提案された問題発言

収録は2月26日（金）午後、日本テレビのスタジオで行われた。翌月の3月に放送される「Huluッス」コーナーの4回を全て収録することになっており、本件放送の収録順は1番目だった。その場にいたのは、A演出、Bディレクター、Cアシスタントプロデューサー、Eプロデューサー、そして男性タレントである。別の放送日を担当する他のディレクター3人や技術スタッフらもいた。

ナレーションの収録を終えた男性タレントはリスの着ぐるみを着用し、コメント収録に移った。このとき、男性タレントは、自分で考えてきた締めコメントがあるとして、「この作品とかけまして、動物を見つけた時ととく」という謎かけと、「あ、犬」をオチとする案を示した。男性タレントは2020年秋ごろから、自らギャグやネタを考えてコメント案として提示することが何度かあり、現場スタッフもこの提案自体に不自然さは感じなかったという。提案はいつも通り和やかな雰囲気の中で行われ、その場にいた4、5人のスタッフたちもそのまま受け止めた。大きな笑い声こそ出なかったものの、お笑いタレントが何かをやったら周囲の者はそれに合わせて笑う、よくあるスタジオの光景だったようだ。

提案を聞いたあと、A演出とBディレクターは責任者のEプロデューサーに向かって、この締めコメントで「大丈夫でしょうか」と問い掛けている。ただ、その疑問は「アイヌ民族に対する差別に当たらないか」との趣旨ではなかった。委員会のヒアリングに対し、1人は「作品とは直接関係のないコメントにしようということだったのに、内容を変更してよいのか」という不安からの問いだったと答えている。もう1人も、差別につながるのではないかという危機意識ではなく、単に、こういうネタでいいのかという考えからの問いだったとしている。

Eプロデューサーは「大丈夫でしょうか」との問いについて、差別問題に関するものとは思わず、そもそも民族や人を動物に絡めたジョークにしていいのかという一般的な問いだと理解し、締めのコメントが誰かを傷付けるかもしれないという発想もないまま、軽い感じで「これくらいなら大丈夫でしょう」と答えたようだ。オチはアイヌ民族をイコール犬としておとしめるものではなく、犬を見つけた人がたまたま発する言葉として使っているに過ぎないから問題ないと考えたという。

男性タレントは、スタッフの前で「あ、犬」のせりふを演じてみせた後、実際の収録に臨んだ。最初に「サイフの日」を締めとするシーンが撮影され、次に問題のシーンが収録された。ところが、A演出は「あ、犬」のせりふだけで終わると尻切れになると感じ、犬の鳴き声を加えることを思いつく。そのほうが、より男性タレントらしさが出るとも考えた。そこで「ワン」を5回重ねてもらうことにし、「あ、犬」の後に続けて「ワンワンワンワンワン」の声も収録した。さらに、後日、映像編集の過程でBディレクターは自身の判断で、犬が吠えながら画面に登場するアニメーションを配することにし、関係スタッフの手を借りて仕上げた。

収録された「サイフの日」と「あ、犬」の2種類の締めコメントのうち、どのような経緯で後者が採用されたのか。誰かの明示的な指示や判断があったわけではなかったようだ。それまでの「H u l u ッス」の収録では、局側が用意した締めコメントと男性タレント発案のそれが並列した場合、「せっかくタレントさんが考えてくれたのだから」という雰囲気の中で、ごく自然に男性タレントの案を採用してきたという。加

えてEプロデューサーが「これくらいなら大丈夫でしょう」と答えていたこともあり、スタッフの誰もが「あ、犬」の採用を当然のこととして捉えていた。Bディレクターも迷うことなく、編集作業に取り掛かった。

4 最終チェック——“無言・無反応は了承”

収録を終えた動画はその後、Bディレクターを軸にして編集担当者らが加わる形で長さ2分間の放送用に編集され、3月9日には字幕を入れる編集作業が行われた。完成すると、Bディレクターは、この動画をA演出、Cアシスタントプロデューサー、責任者のEプロデューサー、そして『スッキリ』の委託先である制作会社のFプロデューサーにインターネット上のファイル共有サービスを使って送った。「H u l u ッス」の動画のプレビューは、新型コロナウイルスの感染拡大に伴うリモート勤務以前から、スタッフが顔を合わせて内容を検討する形ではなく、ずっとリモートで行われていた。

編集済み動画を見たA演出はメッセージ・アプリのLINEを使い、「おもしろいよ」とBディレクターに返信した。ところが、それ以外のスタッフは誰1人としてBディレクターに返信していない。良いか悪いかの反応どころか、編集済み動画を見たかどうかの反応すらしなかった。ただし、それまでに5、6回このコーナーを担当した経験を持つBディレクターにとって、無反応は不思議ではなく、いつものことだった。何か問題があれば誰かが何かを言うてくるはずだと思っており、このときも大きな不安は感じなかったという。

放送前日の3月11日、Bディレクターはナレーションや音楽、効果音などを動画に入れるMA作業を手掛けた。作業後の動画データは、再びファイル共有サービスを使い、「MA後のデータになります。確認をお願いします」とのメッセージを添えて、前記のスタッフと共有した。この動画についても、反応したのはA演出だけだった。A演出はやはりLINEを使って「おもしろいよ」とBディレクターに返した。一方、責任者であるEプロデューサーら他のスタッフからは何の反応もなかった。それでも、こうした制作フローが過去にも繰り返されていたことから、Bディレクターは、VTRに最終的な了承があったと判断し、完成動画を翌3月12日の放送担当者に引き継いだ。

3月9日と同11日の2度にわたる動画共有は放送内容をチェックする関門だったが、いずれもスタッフの大半は「無言」「無反応」であり、誰が何をOKしたのかの意思疎通すらないまま、本件放送はオンエアの舞台に上がった。

5 問題発覚後の対応

『スッキリ』制作チームの上層部、すなわちG統括プロデューサーやHチーフプロ

デューサーらは、本件放送を3月12日のオンエアで初めて見た。そのうちの1人は『Future is MINE』の内容に興味をひかれる一方、締め「犬」という表現は侮蔑的な表現だから不適切ではないか、と感じた。しかし、コーナー担当のプロデューサーがコンプライアンス上のチェックをしっかりとやっているから問題はないはずだと判断し、その場で特に反応することはなかった。もう1人はその時、「これはぎりぎりだ」という言葉を誰に言うでもなく口にした。ただし、アイヌ民族に対する直接的な差別表現だと言い切ることもできず、別の業務に移ったという。

視聴者らからの抗議は、本件放送の終了直後から日本テレビに届いた。その中には、北海道アイヌ協会や系列局である札幌テレビからのものもあった。並行してSNS上でも抗議の声が次々と書き込まれていく。事態を把握したG統括プロデューサーやHチーフプロデューサーは、情報・制作局の幹部らに状況を報告し、幹部らは直ちに情報収集を始め、対応に着手した。その結果、同日夕方のニュース番組『news every.』の中で「アイヌの方たちを傷つける不適切な表現がありました」とお詫びのコメントを放送した。同時に、日本テレビのウェブサイトでも同じ趣旨の謝罪文を掲載した。週が明けた3月15日（月）の『スッキリ』では、放送当日の『news every.』よりも長い時間をかけて、お詫び放送を行った。このとき、日本テレビは当初にはなかった「差別」という文言を使用。「アイヌの方たちを傷つける不適切な表現がありました。制作に関わった者に、この表現が差別に当たるという認識が不足して」いたとの表現に改めた。

3月22日には、小杉善信社長が記者会見で謝罪したほか、第546回放送番組審議会（2021年3月開催）でも本件放送が取り上げられ、委員らのコメントの一部は4月4日の広報番組『日テレアップDate!』において放送されるとともに、ウェブサイトに掲載された。さらに、6月には札幌で開かれた北海道アイヌ協会の総会に小杉社長が出席し、アイヌ民族の地位の向上や正しい理解がようやく進み始めている中、本件放送が水を差し、時計の針を戻してしまったと述べて謝罪した。

本件放送に関しては、政府の内閣官房からも放送当日に抗議があり、3月16日には加藤勝信官房長官が定例会見で「(放送は)極めて不適切」と述べた。政府は内閣官房アイヌ総合政策室が中心になって対応を講じることとし、同室は「再発防止検討会(仮)」を立ち上げ、総務省情報流通行政局、法務省人権擁護局、国土交通省北海道局、文化庁企画調整課の各担当者を交えて日本テレビから本件放送の経緯や再発防止策のヒアリングを行うなどした（2021年7月13日現在）。

IV 委員会の考察

アイヌ民族は長い歴史の中で、日本への同化を強いられ、差別されてきた。差別に際しては、まさに「あ、犬がいる」「犬が来た」などの表現が使われてきた。本件放送の「あ、犬」や「ワンワンワンワン」は、日本テレビ自身も認めているとおり、アイヌ民族に対する直接的であからさまな差別表現であることに疑いはなく、強い非難に値する。では、その侮蔑的表現を含む本件放送がオンエアに至ったのはなぜか。ストップをかける機会はなかったのか。ヒアリングを通じた調査・検証を踏まえて考察する。

1 隙だらけのチェック体制

「Hu l u ッス」は、日本テレビのグループ会社が運営する動画配信サービスHu l u が扱う配信作品の紹介コーナーであり、『スッキリ』の中での位置づけは決して高くはなかったようだ。実際、現場スタッフは全員、「ニュース班」「企画班」などを主、「Hu l u ッス」を従とする兼務体制の中で制作を担っていた。2018年5月のコーナー発足時には2人いた日本テレビの担当プロデューサーも、その後は1人に減っている。また、委員会のヒアリングによれば、2020年秋頃には、「Hu l u ッス」に費やす労力や時間をもっと減らすよう上からの指示があったと受け止めたスタッフもいる。

こうした中、動画の最終チェックは、コーナーの担当プロデューサーに任せられ、制作を統括するプロデューサーらは最終チェックに関与しないという流れができていた。

「Hu l u ッス」はパッケージ化されたPR的なコーナーであり、番宣に近いコーナーだと話すスタッフも複数いた。さらに、扱う作品のほとんどが娯楽系のコンテンツだったことから、コンプライアンス上の問題が生じるとは考えておらず、チェックの意識に乏しかったと認める声もあった。

そうした手薄な体制に加え、現場でのVTRチェックにおいても、あいまいな運用が続いていた。動画のプレビューの機会は2回あった。映像編集が終わり字幕も入った動画の共有時と、音声も収録されて完成形となった動画の共有時だ。後者がコーナーの放送内容をチェックする重要な最終関門だった。インターネットのファイル共有サービスを使い、メールや電話などでやりとりするオンライン・プレビュー方式は便利であり、特にコロナ禍のような事態下では、うまく利用すれば大きな力を発揮しうる。しかし、適正に運用されなければ、大きな落とし穴にはまり込む危険がある。「Hu l u ッス」がまさにそうだった。ディレクターが動画を完成させ、それを上司らと共有して是非の判断を仰いでも、コーナーに責任を持つ日本テレビのプロデューサーからは「何も問題がなければ何の連絡もしない」というやり方が常態化していたので

ある。動画の共有に使われたインターネットの汎用サービスでは、誰が視聴したのかといった記録も残らない。

本件放送を担当したBディレクターもそうした状況下で動画の確認を依頼し、プロデューサーから何の反応もないことをもって、最終了承を得たと判断している。制作を統括するプロデューサー陣の1人は、それは危険な運用で、了承するなら当然そのことをスタッフに伝えるべきだとの趣旨を述べた。

専任の担当者がない掛け持ちでの制作体制、無言・無反応が最終了承と解されていた運用、きちんとやっているはずだという上層部の思い込み。こうした隙だらけのチェック体制を考慮すれば、今回の事態は起こるべくして起きたとも言えよう。

2 自らの制作番組に対する“こだわりの薄さ”

「H u l u ッス」で取り上げる映像作品は、事前にH u l u から候補リストの提示があり、その段階では、動画の全編は提供されておらず、候補作品を決定前に見る仕組みにはなっていない。制作が始まり、作品がH u l u から提供された後も、実際に作品を視聴していたのは、担当ディレクターだけで、コーナー責任者のプロデューサーらは、紹介する作品を視聴することは過去も含めて一度もなかったとのことだ。

『F u t u r e i s M I N E』についても同様だった。A演出は本件放送の制作段階では、動画投稿サイトのY o u T u b e にアップされていた宣伝用の短い動画しか見ていない。全編を視聴したのは担当のBディレクターだけであり、その他のスタッフが作品を実際に見たのは、本件放送のオンエア時以降である。

番組制作の現場は多忙を極めている。現場には局側だけでなく、制作会社のスタッフ、派遣会社からの要員、フリーランスなどが多数、入り乱れるように加わっている。業務も細分化され、まさに「H u l u ッス」の制作スタッフ全員がそうだったように、兼務も珍しくない。ほとんどのスタッフは委員会のヒアリングに「そこまで見ている余裕はない」「多忙」といった事情を語っている。

もちろん、一般的には、多忙を極める現場において、番組制作に携わる者が漏れなく紹介作品を通して視聴することは困難だ。「H u l u ッス」についても同様であろう。この枠で取り上げられるのは主にドラマや映画などの娯楽作品であり、2時間以上に及ぶ作品やシリーズものもある。さらに『スッキリ』全体にはさまざまなコーナーや企画があり、チーフプロデューサーや統括プロデューサーらまでが紹介作品を視聴することは現実的ではない。

しかしながら、本件放送で取り上げた『F u t u r e i s M I N E』については、民族をテーマにしたものであるなどの理由から扱いには十分な注意が必要だとA演出らが事前にはっきりと認識していた。時間も35分間とそれほど長くはない。Bディレクター以外の同コーナーを担当するスタッフらには、この作品を視聴する時間

が本当になかったのだろうか。作品の提供はオンラインで行われており、スタッフは局に足を運ぶ必要もなく、各自のコンピューター端末で視聴が可能だった。実際、委員会のヒアリングに対し、スタッフの1人は「事前に作品を視聴していれば、私は絶対に止めた」と悔いた。『Future is MINE』の作中では、アイヌ民族がこれまでどのような状態に置かれていたかが十二分に描かれているからだ。

スタッフ自身が「軽々しく扱え」ないと感じていた作品であったにもかかわらず、視聴者に紹介する前に作品を見たスタッフは1人しかいなかった。この事実は、放送内容に関する局側の“こだわりの薄さ”を物語っていると言えよう。

3 差別に関する知識の乏しさと放送人としての感度

アイヌ問題に関する知識の乏しさも無視することはできない。本件放送を担当したスタッフらは、アイヌ民族に関する差別の歴史や実態については、ゼロか、極めて漠然とした知識しかなかったと認めている。『Future is MINE』を取り上げると決まったとき、現場スタッフたちには「民族問題は難しい」「アイヌ民族という存在だけは知っている」といった程度の認識しかなかった。

「Hulu」の責任者であるEプロデューサーは、問題のコメント収録の現場でA演出やBディレクターから大丈夫でしょうかと問われた際、「このくらいなら大丈夫でしょう」と答えた一方、自らはこのVTRを考査に出して判断を仰いだほうが良いと考えた。しかし、Eプロデューサーは、考査に出すことを失念したという。振り返って考えれば、実際はそれほど大きな問題とは思っておらず、すぐに忘れてしまう程度だったという。アイヌ民族に対する知識も乏しく、アイヌ民族とはエスニックでカッコいい人たちと認識していたぐらいで、差別されてきた人々であるという知識はゼロだったとのことだ。他の現場スタッフも、アイヌ民族についての知識に関する限りほぼ同じようなものだったと言ってよい。「Hulu」班は主にエンタメ系のスタッフで構成されていたが、差別問題に鋭敏な報道系のスタッフがいたら今回の事態を招くことはなかっただろうと悔いる声も聞かれた。

日本テレビはBPO宛の報告書で、今回の事態を招いた原因の1つは「基本的教育の不足」だったと結論付けている。しかし、差別に関する知識をどう養うか、それを放送局内のいわば義務としてどこまで担うべきなのかといった諸点について、統一的なものさしを示すことは容易ではない。

日本テレビや『スッキリ』の制作会社においては、種々の研修会や勉強会が日頃から行われている。2013年と翌14年には、人権の専門家を招いた勉強会が社内で行われてもいた。ただし、そうした研修の機会に差別問題がどう語られたか、アイヌ民族の問題が触れられたかについて、スタッフらの記憶はあいまいである。

時代をさかのぼると、日本テレビには1994年の元日、大型クイズ番組の中で、

出演したお笑いタレントがアイヌ民族の集団舞踊「イヨマンテの夜」の曲を流しながら踊ってみせた際、アイヌ民族の尊厳を著しくおとしめ、差別を助長したという苦い経験がある。当時もアイヌの人たちからの強い抗議を受け、局側も再発防止に務めた。30年ほど前に入社した幹部らによると、当時は「イヨマンテの夜」に関する勉強会も開かれていたようだが、現在社内では全く継承されておらず、「Hulu」の制作スタッフも誰1人、「イヨマンテの夜」に関する知識を有していなかった。これらのことからしても差別に関する知識の醸成は容易ではないと言えよう。

もうひとつ、委員会が指摘したいのは、放送に携わる者が当然に持っているはずだと期待されている“感度のアンテナ”の低さだ。

差別問題に限らず、放送人には社会問題全般の基本的知識や、それに見合った感度が欠かせない。仮にアイヌ民族の歴史や差別に関する知識がなかったとしても、そうした“感度のアンテナ”が機能していれば、人を動物に例えた発言を公共の電波に乗せることへの強い忌避感が発動され、オンエアを阻止する力として働いたはずだ。確かに、「人を動物に例えていいのか」という疑問を抱いたスタッフはいたが、実態としてはすぐに自身の頭から消えていったのであり、収録作業や編集済み動画に強い疑義を挟むことはなかった。“感度のアンテナ”が弱くなっていたがために、深刻な事態を招いてしまったのではないか。

放送局における「基本的な教育」の重要性を否定する者はいないだろう。しかしながら、手痛い経験を伴った重要な知識でさえも、日本テレビ自身が経験したとおりの時間の経過とともに、かくも簡単に薄らぎ、消えていく。そうした現状があるからこそ、基本的な感度をいかに保つかという大きな課題も本件放送は教えている。

4 差別の意図はなかったという底流

「差別する意図はなかった」という言葉も、委員会のヒアリングで日本テレビ側から聞かれた。オンエア当日に社内では対応策が協議された際、お詫びの文言は「不適切な表現があった」とどめ、「差別的な表現」という言葉は使用しない方向で話がまとまったという。3日後のお詫び放送で、ようやく「この表現が差別に当たるという認識が不足して」と謝罪した。いったん「差別」という語句の使用が控えられたのは、最初から入れてしまうと、差別する意図があって差別したと誤解されることを危惧したからだった。

これとは別に、現場スタッフの1人は問題の発言について、「この程度ならアイヌの人たちもだじゃれとしてわかってくれるだろう」とも思ったと説明し、アイヌ民族を意図的に差別するつもりは全くなかったと力説した。他の現場スタッフも、言葉こそ違え、差別する意図は全くなかったし、こんなに大きな問題になるとは思いもしなかったと異口同音に語っている。

しかし、差別の意図、つまり“悪意”がなかったとしても、それによって差別的な表現を用いた番組を放送した行為が容認されるわけではない。まして、差別されてきた側のアイヌ民族にとっては、さしあたり“悪意”の有無は二次的な問題であろう。

また、差別が絡むテーマは複雑だから短い尺では取り上げづらいという感覚も見逃してはならない。複雑な問題を回避し続けることで、差別に対する感度や知識を耕す機会を失い、悪意さえなければ差別ではないという誤った感性が育まれた可能性すらある。

ヒアリングの場で、スタッフたちはみな誠実であり、番組制作に真面目に向き合ってきた経験と自らが関与した事態への深い反省が十二分に伝わってきた。本件放送の制作過程に悪意が存在したことを示すものもない。しかし、だからこそ、事態は深刻なのかもしれない。悪意を持たないスタッフが自らの知識不足を自覚しないまま、放送人としての感度も低いままで番組制作に携わっていくと、その番組がときに人を苦しめる、あるいは社会問題化する可能性を高めてしまうことに、制作者はいつまでも気が付かないことになりかねない。

V 委員会の判断～放送倫理違反があった

本件放送はアイヌ民族に対する、明らかな差別表現を含んだものだった。日本テレビも内部調査やBPOへの報告書で本件放送が強い非難に値することを明確に認めており、このことに争いはない。

同時に、委員会の検証によれば、本件放送がオンエアに至った背景には（1）収録動画の最終チェック体制が極めて甘かった（2）アイヌ民族やその差別問題に関する基本的知識がスタッフ間で決定的に不足していた、という明確な要因があった。つまり、『スッキリ』の制作に関して、番組のチェック体制が十分に機能し、差別に関する知識がスタッフに一定程度備わっていれば、差別発言がオンエアされ社会に広く伝播することはなかったと思われる。

放送が「国民にとって最も身近なメディアであり、その社会的影響力はきわめて大きい」（「放送倫理基本綱領」）存在である以上、その番組制作においては、「放送の公共性を重んじ、法と秩序を守り、基本的人権を尊重」（同）しなければならないのは、当然である。

日本民間放送連盟の「放送基準」は、その前文で「民主主義の精神にしたがい、基本的人権と世論を尊び、言論および表現の自由をまもり、法と秩序を尊重して社会の信頼にこたえる」との理念を述べ、「（5）人種・性別・職業・境遇・信条などによって取り扱いを差別しない」ことや、「（10）人種・民族・国民に関することを取り扱う時は、その感情を尊重しなければならない」ことをうたっている。

委員会は、本件放送がこれらに反しており、放送倫理違反があったと判断する。

また、本件放送については、日本テレビが自ら定めた「番組基準」内の「すべての国および人種・民族は公平に取り扱い、その尊厳を傷つけてはならない」に抵触していると判断できることも付言しておく。

日本テレビは本件放送の後、迅速に問題点を洗い出し、アイヌ民族の歴史を学ぶ勉強会などの開催、放送内容のチェックを目的とした複数プロデューサーの配置といった再発防止策を整えた。アイヌ民族の歴史や文化を扱う番組を放送していく方針も示している。それらがどう実を結ぶかについて、委員会は注意深く見守っていきたい。

VI おわりに～差別と向き合う「しんどさ」を乗り越えて

日本テレビの幹部は、本件放送後に謝罪のため札幌へ出向いた際、アイヌ民族の古老と会い、自分が犬だといって差別を受けてきたことを思い出して悔しかったと涙ながらに言われたという。北海道アイヌ協会との面談でも、本件放送の持つ問題性を厳しく問われたとのことだ。これらの声の向こう側では、さらに多くのアイヌの人たちが本件放送に対してつらい思いを抱いていたに違いない。

委員会のヒアリングの場で、幹部は差別に対する教育が局内で機能していなかった点を悔やみ、次のような趣旨を言明した。

「信頼回復のためには研修を繰り返し、繰り返し、そして番組でもきちんと差別問題に取り組むしかない。これまで、私たちは逃げていた、避けていたところがあったと思う。これからは踏み込んでいき、社会に正しいことを知らせていく」

また別の幹部は「テレビには少数者に光を当て、視聴者と一緒によりよい社会を作っていくという役割がある。(情報・制作局だけでなく、報道局など他部署も含めて)われわれは覚悟を決めている」という趣旨を強調し、放送本来の役割を見つめ直す姿勢を明確にした。

社会にはさまざま差別が存在する。数限りない差別は、時代とともに移り変わっていくが、近現代の歴史は、こうした差別を地上から消し去り、すべての人々が基本的人権を獲得し、その人権を守り発展させていくための闘いの歴史だったという一面を持つ。

当然のことながら、差別の根絶は簡単に進むものではない。人は普通、差別される側の「痛み」をなかなか感じるできない。自らの差別的意識に気付くことは容易ではなく、差別するつもりがなかったり、差別に関する知識が足りなかったりすることも多い。また、どの差別が強く社会全体で意識されるかは、時代背景によっても

大きく異なる。例えば、被差別部落を題材にした小説「破戒」や「橋のない川」、漫画「カムイ伝」がよく読まれた昭和の時代には、部落差別の解消に社会の関心が集まった。現代においては、主にSNSなどのインターネット・ツールを経由して、LGBTQや女性に対する差別が社会でクローズアップされている。

では、本件放送で問題になったアイヌ民族に対する社会全体の関心は、どうだったか。正直なところ、委員会は今回の審議を通じて、アイヌ差別に関する社会的関心の変遷も感じずにはいられなかった。アイヌ民族の独自文化を尊重しようという動きは、1997年のアイヌ文化振興法で最初に結実した。ところが、その時期をピークとして、アイヌ民族に対する関心を日本社会は徐々に低下させていったのではないか。

委員会による今回のヒアリングでは、60代の取締役を筆頭に、上の世代になればなるほど、侮蔑的表現を用いた本件放送に対し、自分が現場スタッフだったら絶対にオンエアしないと切り切る傾向が強かった。その半面、40代以下の若い世代になると、アイヌ民族の名称は知っていても、どういった歴史と文化を持っているのかという知識は乏しく、差別の歴史と実態についての知識はほとんどないに等しかった。日本テレビもBPOに宛てた報告書において、スタッフのこうした知識不足を大きな理由のひとつに挙げている。それを考えると、この問題が日本テレビで生じたのは、たまたまに過ぎず、同じような問題が生じるリスクは、どの放送局にも存在していると言えるだろう。

先述したとおり、近現代の歴史は、差別解消に向けた闘いの歴史でもある。その闘いにおいて、メディアの持つ役割は極めて大きい。どんな人々がどんな差別に苦しんできたのか。今はどこにどんな差別が温存されているのか。差別をなくすためには何が必要か。放送局はこれらを見て見ぬふりをしたり、差別について誤った情報を伝えたりしてはならない。

複雑で難しい問題だから、差別された人々にスポットを当てると偏った番組になりかねないから、視聴率が取れそうもないから……。差別問題から目を背けたくなる理由はいくらでもあろう。しかし、差別根絶への第一歩は「知る」「知らせる」から始まる。そして放送人にとって「知る」ことの最大の契機は、番組を制作すること自体にあるはずだ。放送を続けることでしか、放送人としての感度は磨かれない。本件放送から得られる教訓は、差別問題に臆することなく向き合うべきだという放送界全体に向けたメッセージをも含んでいると委員会は受け止めている。